

第9章 本通りの[柴燈場]と[柴明場]に係ること

現地道標は[柴燈場]となっているが、西川町史には[柴明場]という古語が出て来る、その意味合いについてである、同じことなのか、違うことなのかという疑義がある。一般的に使う[柴燈場]の解明から始める。柴は雑木の小枝をいう。柴燈からは「おさいとう」、あるいは「さいとうごま」を想起する。『とう』の発音は『燈』、あるいは『灯』が一般的である。つまり、それは『ともしび』『あかり』である。神仏宗教儀式の護摩供養では柴燈護摩、柴灯護摩と称する。なお、『柴』は『採』を当てる地域もある。

さて、本通りにおいては、[柴明場]と『明』を充てた意義について考察する。この文字は日と月の並列組合せであり、ずばり『日・月』を神格化した信仰を踏まえる祖霊の送迎祭儀に関係したものと直感する。「さいと」の『と（明）』は平等的日月信仰の象徴である。つまりは日の太陽と月の大陰に対する信仰である。地球上の生物に対して、太陽（日）は光熱を恵み、大陰（月）は水（降雨・河川・海）——月が水を生むという科学的な根拠は見当たらないが、潮汐力に係り海水（潮）の干満には直接影響——を恵む。以下、そのような考え方の根拠を探るべく係る環境・事情について記述する。

1. 現地周辺環境

図－1、柴明場は本道寺から登り始め、急坂はあまりないものの確実に標高を稼ぎながらアップダウンを繰り返しつつ開けたこの高台に辿り着く。約10m四方ほどの平らな場所である。月山山頂は視認出来ないものの大きく眺望が開ける、いわば見晴台である。特に北方向は、遅くまで残雪のある南斜面が視野一杯に広がる。清川行人小屋も肉眼でははっきり確認出来る。180mほど先の

『元高清水・九十六丁』地点まで一旦少し下り、そこを最低鞍部として、月山を目指し登り一辺倒となる。

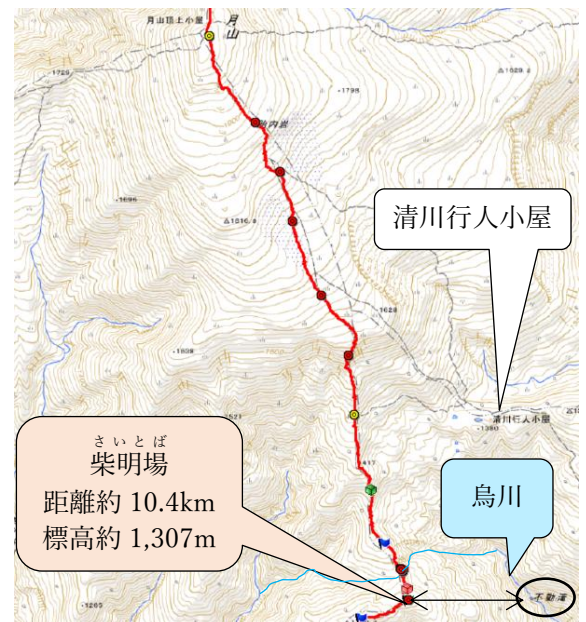
また、柴明場より真東方向水平距離680mほどの場所に、岩根沢旧日月寺が奥の院として不動明王（不動尊）を祀って来た不動滝がある。ここを何かの祭祀の舞台にしたという直感が湧いた。具体的にどんな祭祀を行った

のか、月山山頂における柴燈と同様（類似）の役割を果たしたのではないかという直感が湧いた。また、国土地理院地形図上には書かれていないが、湯殿山側ルートにおいて牛首の西側に古称地「柴灯森」（標高1,728m）があるが、相互に何か関係ありそうだが何なのか。

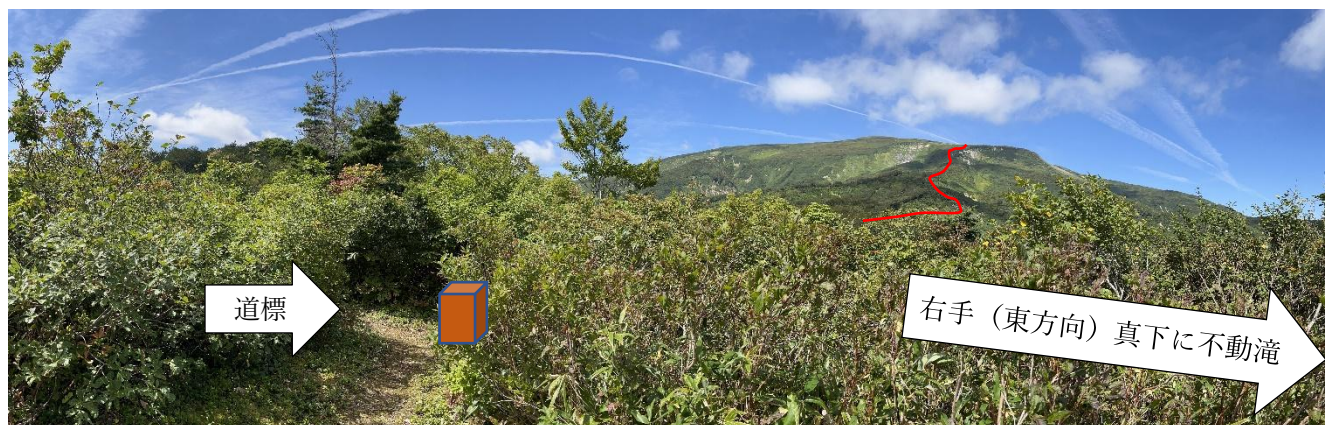
図－2は柴明場から月山山頂方向（北方）を望んだ風景である。また、図－3は反対に北側から南東方向を望んだ風景である。これらを同地形図にプロットすると後記図－4のとおりとなる。

2. 月山における古儀の採燈祭

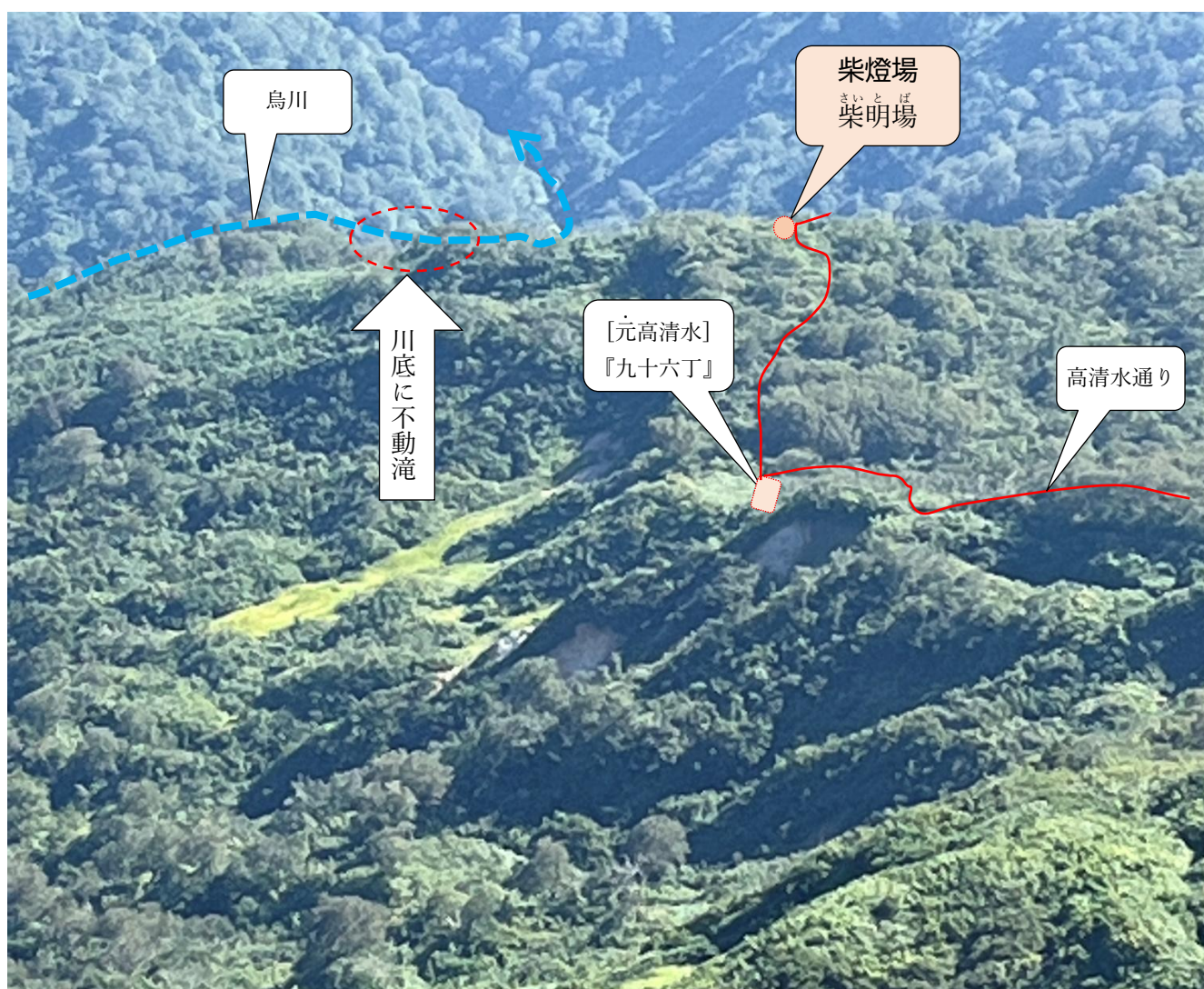
内藤正敏著「修験道の精神生活」（青弓社）より、部分的に拝借・引用する。同書に興味深いことが記述されている。



図－1



図－ 2



図－ 3

「――・ 八月十三日の夜、①月山頂上（1,979m――とあるが、三角点のある最高点は1,984m）で行われる採燈祭は素朴で神秘的な祭りだ。月山神社本宮の裏で行われる。やがて陽もとっぷり暮れると、採燈の炎は数メートルの高さに燃え上がる。この山頂の採燈の火を見て、②八合目の小屋の前でも大火が焚かれる。そして、山麓の手向の集落の人々は、遠く山頂と八合目で燃え上がる採燈の火を見て、家々の仏壇に灯明をともし。ただ、里の人にとって、採燈の火は盆の“迎え火”だが、山頂



図－4

いるものから見れば、祖霊を下界に下す“送り火”ということになる。そして、八月十五日、下界に帰って行った祖霊たちは、家々で焚かれる送り火によって、再び月山山頂にもどってくる。現在、1ヶ月遅れの新暦で行われているが、かつては旧暦の七月十三日に採燈、十五日に送り火が焚かれた。※1十三夜の月のもとで下界に下りた祖霊たちは、※2十五夜の満月に吸い寄せられるように再び月山山頂に帰って来て再生を遂げたのである。――」同様の記述は様々な書籍に載っている。

(※1)『十三』は十三仏信仰と係るがここでの説明は割愛する。

(※2) ウィキペディア (Wikipedia) より。満月は、望月 (ぼうげつ・もちづき)、盈月 (えいげつ) ともいう。月齢は 13.8～15.8 であることが多く、平均では 14.8 である。太陰暦では 15 日か 16 日であることが多いので、満月の日の晩を十五夜とも呼んだ。満月は、ほぼ日没とともに東の空に昇り、明け方には西の空に沈む。

3. 燈火の広がり

前記図－4、しからば、羽黒側八合目の小屋の所で焚いた火の役割を探る必要がある。その(八合目の)火については大火と称し採燈とは称していない^{N o n}そうである、何か意味があるのだろうか。次の

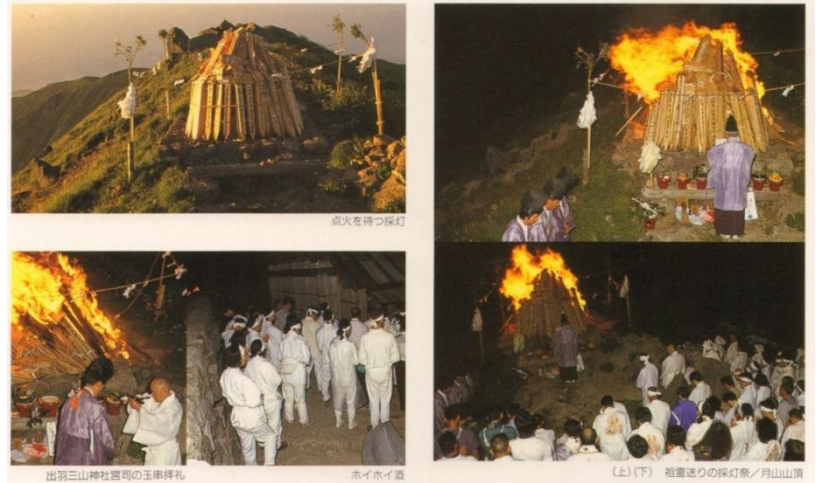
2 点は当初直感した理由である。

✓ 1；直感は山頂と下界を繋ぐ中継の役割である。しかし、山麓の手向集落等と山頂を結んだ視線を見ると何も支障になるものがないので、八合目における火の中継点としての機能は不要ということになるのか？

✓ 2；次に行者配慮、そこで八合目小屋と「柴灯森」の 2 地点位置から共通する点を考えて見る。本来の祖霊送迎信仰の場所は山頂であるが、夕暮れ時から夜間にかけての祭儀であり、体力的に登れない人が出て来るだろう。山頂まで行けない人のために祖霊送迎採燈の祭儀場として、その 2 個所を設定した、つまり、遥拝所的な位置付けにしたということではないのか？

✓ 3；参考に、図－5 は伊藤武著「出羽三山」(みちのく書房)より拝借した月山山頂での柴燈祭の様様である。図－6 はその場所で、月山神社本宮の裏手を撮ったものである。

✓ 4；念のために手向の羽黒山正善院島津代表(住職)に電話で問い合せて見た。「――・ 以前は月山山頂には 13 仏を祀っていた。山頂で焚いた迎え火を山麓までを 13 仏に^{なぞら}準えて、各小屋に 13 仏を配当して祖霊を順次繋いで里の家々に^{おろ}下した。八合目小屋前のことはそのうちの代表的な一つということではないか。――」と言われた。



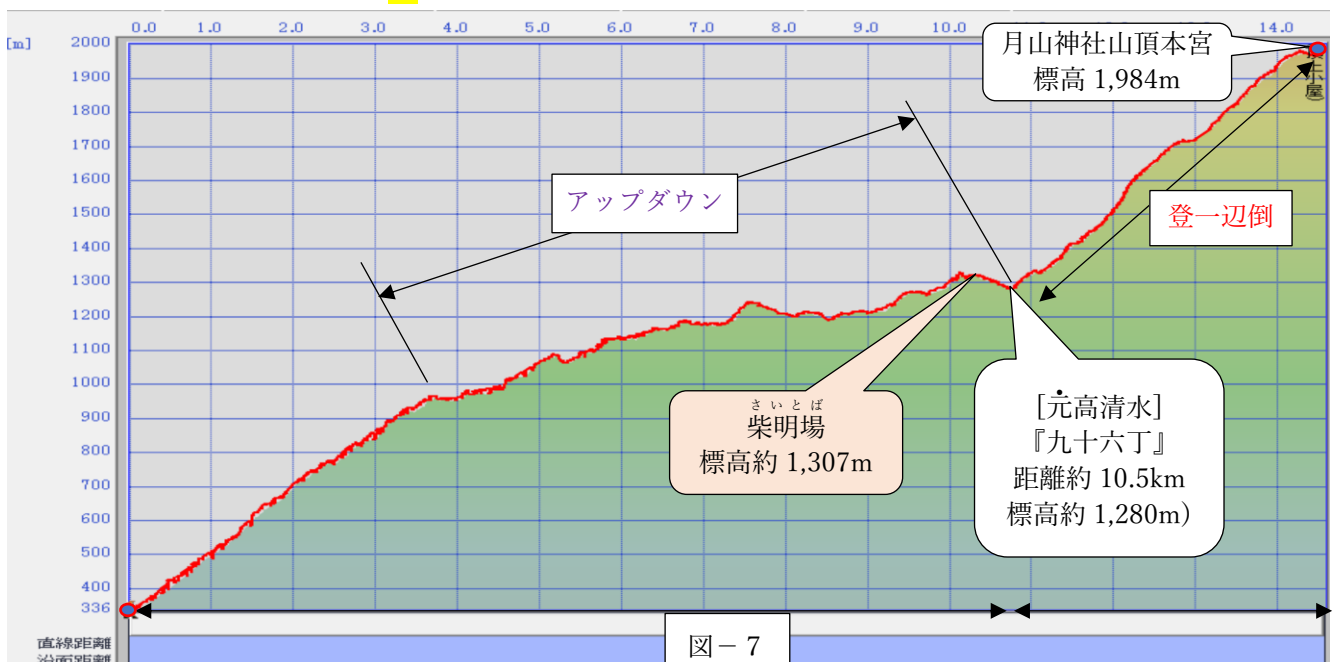
図－5



図－6

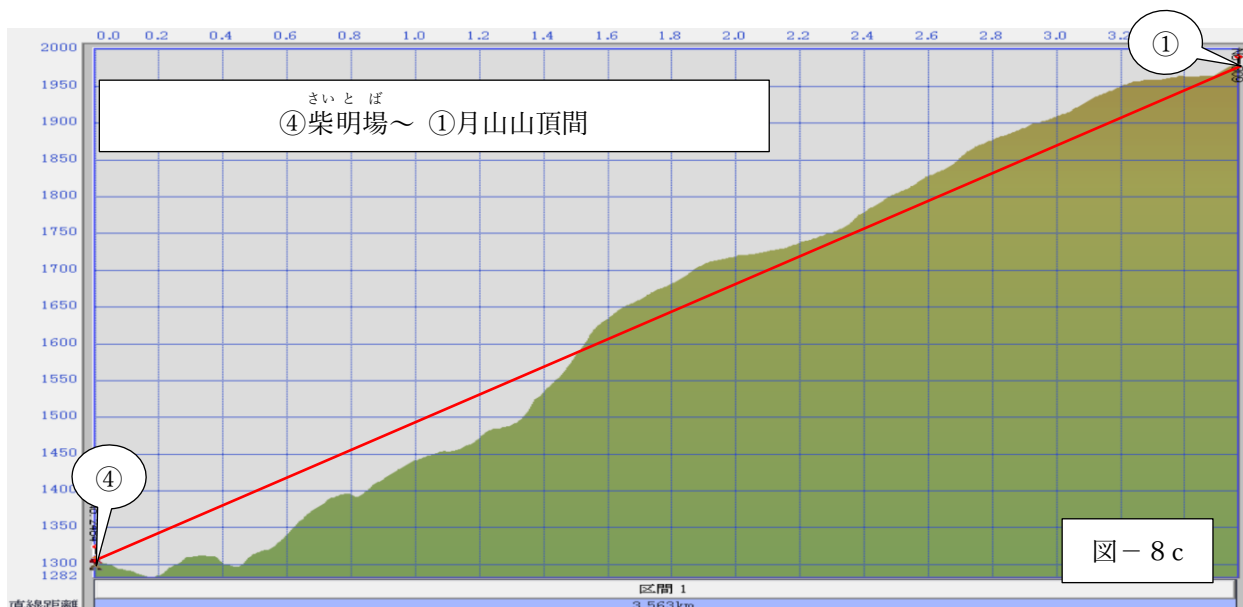
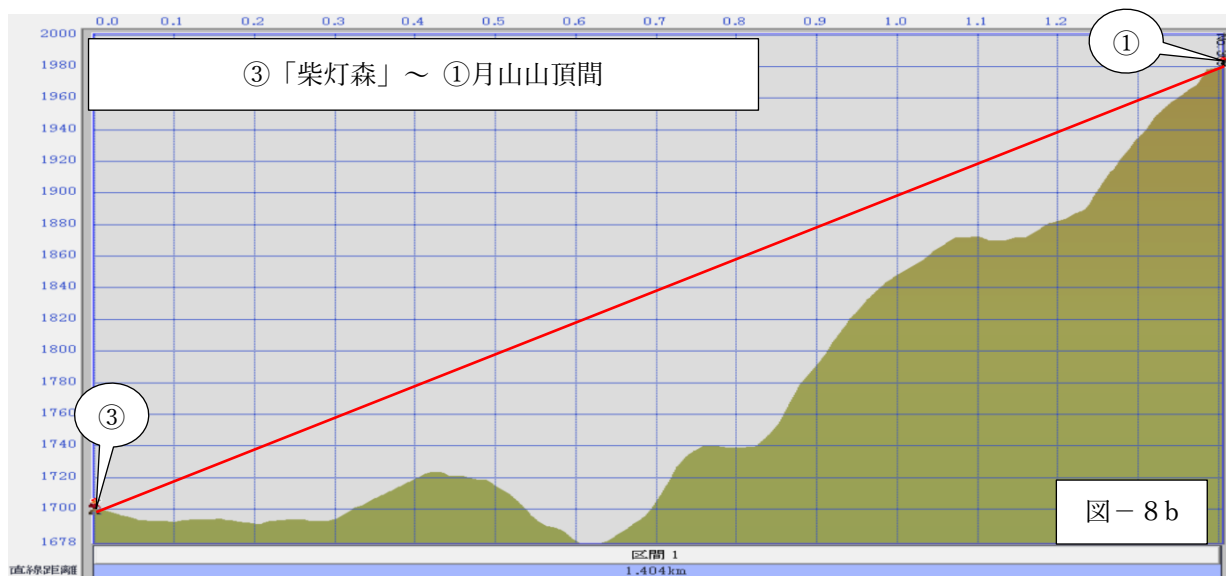
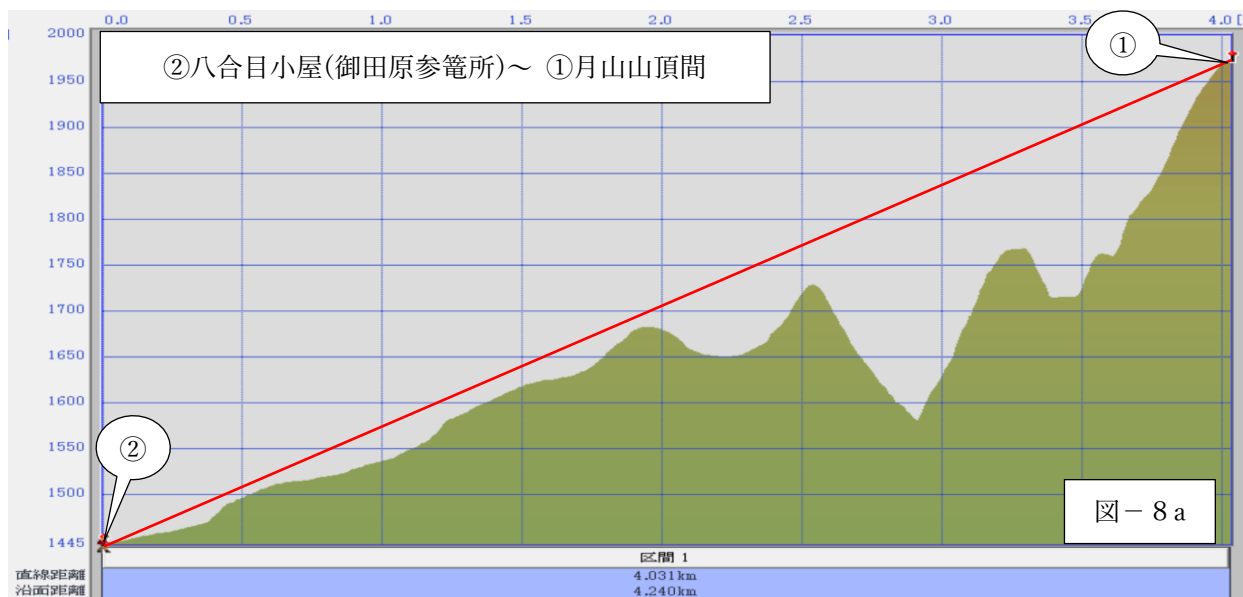
4. [柴明場]の信仰的存在意義

まずは参考のために、図－7 は本通りの断面である。



図－7

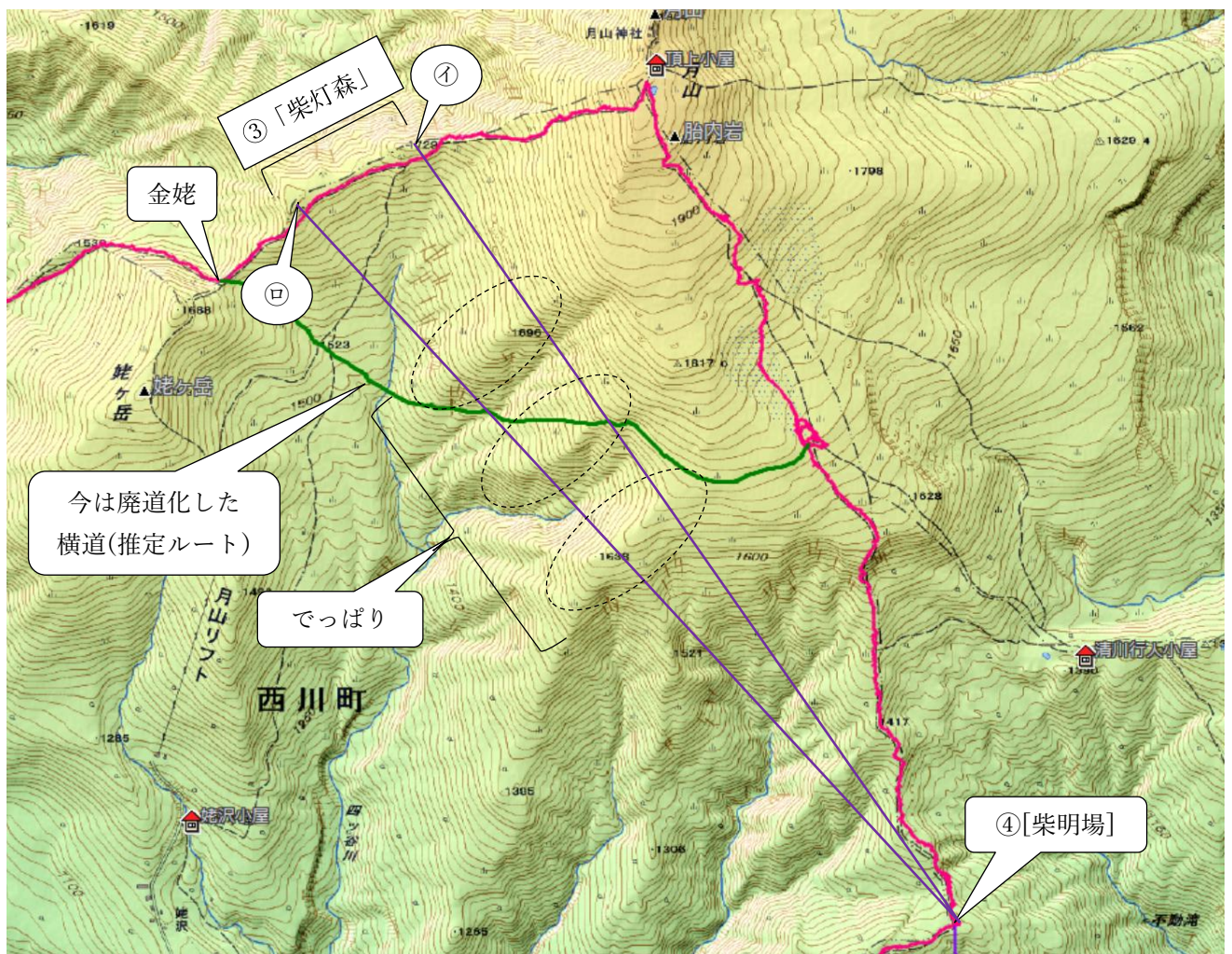
周辺事情から攻めて見る。いずれにしても、ここは様々な祭儀の舞台ではなかったのかと考えている。また、前記図－4におけるそれぞれの2点間を直線で結んでその断面図を取って見る。その結果は図－8 abcの3とおりである。



(1) 月山山頂柴燈祭儀と同時点火の是非

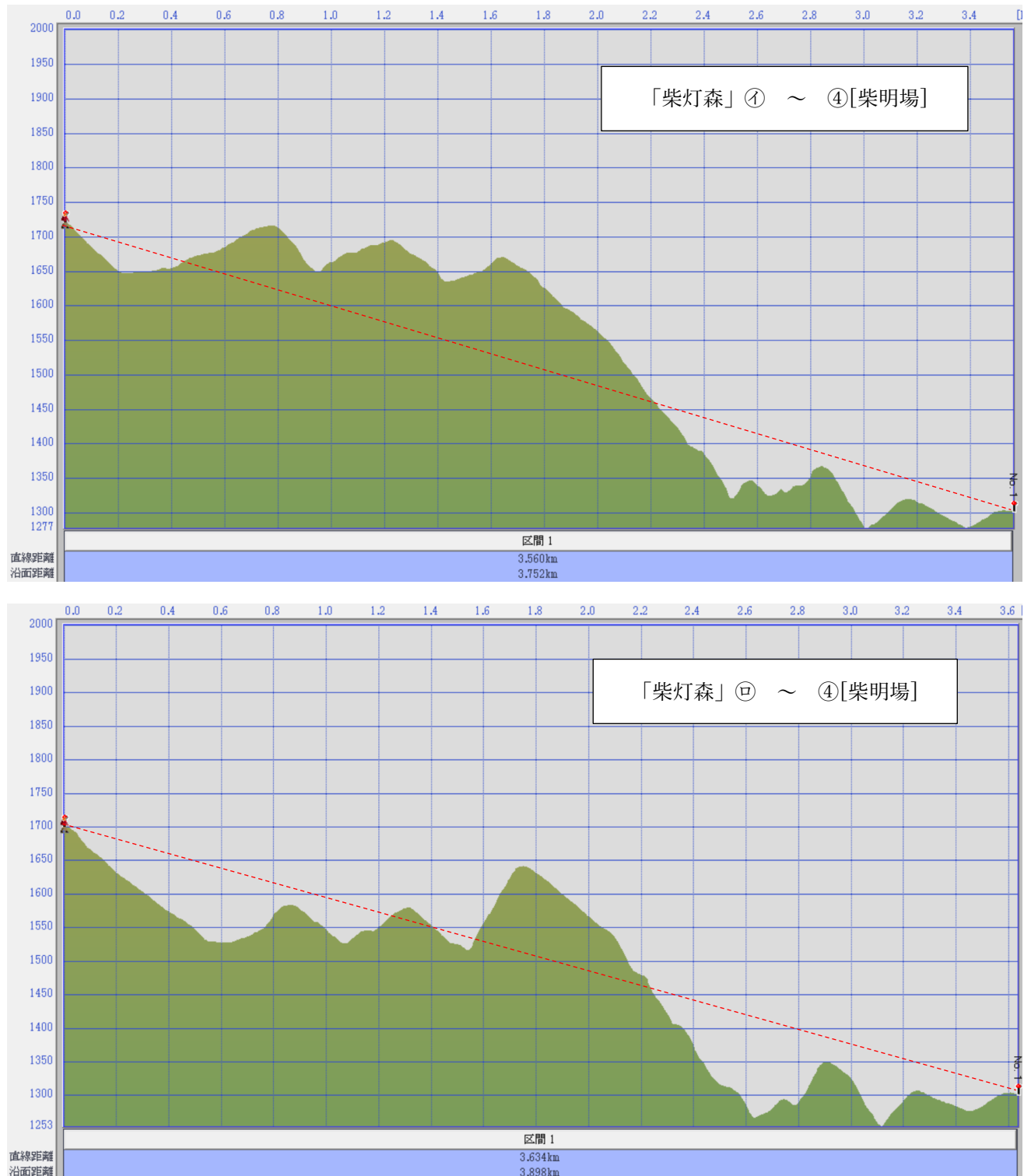
✓ 1 ; 問題は山頂の採燈に合わせた同時点火・リレー点火の可否は如何にである。すると、図－8 a/②八合目小屋(御田原参籠所)～ ①月山山頂間と、図－8 b/③「柴灯森」～ ①月山山頂間においては視線上に支障となる山はない。したがって、山頂での点火を肉眼で見届ける可能性はある。ところが、図－8 c/④柴明場^{さいとば}～ ①月山山頂間では視線上に山の出っ張り(目測で最大 40m 前後)があって、相互に手元付近の火は確認出来ないのではないか。そこで見えない地点相互の連絡手段としては、戦^{いくさ}で多用したであろう情報伝達手段「のろし」が話題となる。しかし、風や雲の動き、天候に左右されるだろう。あるいは、時間を予め決めておいたということだろうか。果たして、点火の予定時刻を決めていたとしても、現地ではどのように把握出来たのだろうか。江戸時代以前、人々が時刻を知るために用いていたのは、季節ごとの太陽の傾きで、感覚的に時刻を読み取っていた(日時計)と言われている。ネットには水時計や燃焼時計(ローソク時計、香盤時計、ランプ時計)、砂時計が載っているが、山中の現地では簡単には使えそうもないと思えるが。ただ、ここでは柴明場で柴燈した(薪を燃やした)であろうという前提で考えているが、それとても、いつの時代から始まったのだろうか? すると、前記図－4 中の①②③に④を直接結び付けて、同じ日の同時刻に柴燈することの前提には無理が生ずるという気がする。

✓ 2 ; [柴明場] と「柴灯森」との関係断面構成を検証(図－9 参照)して見る。「柴灯森」側については、標高約 1,728m の①、または、金姥側に少し下った標高約 1690m[㊦]地点の 2 ポイントを基点として見る。[④柴明場]の標高は約 1,307m である。その両基点を結んで断面を見て見る。



図－9

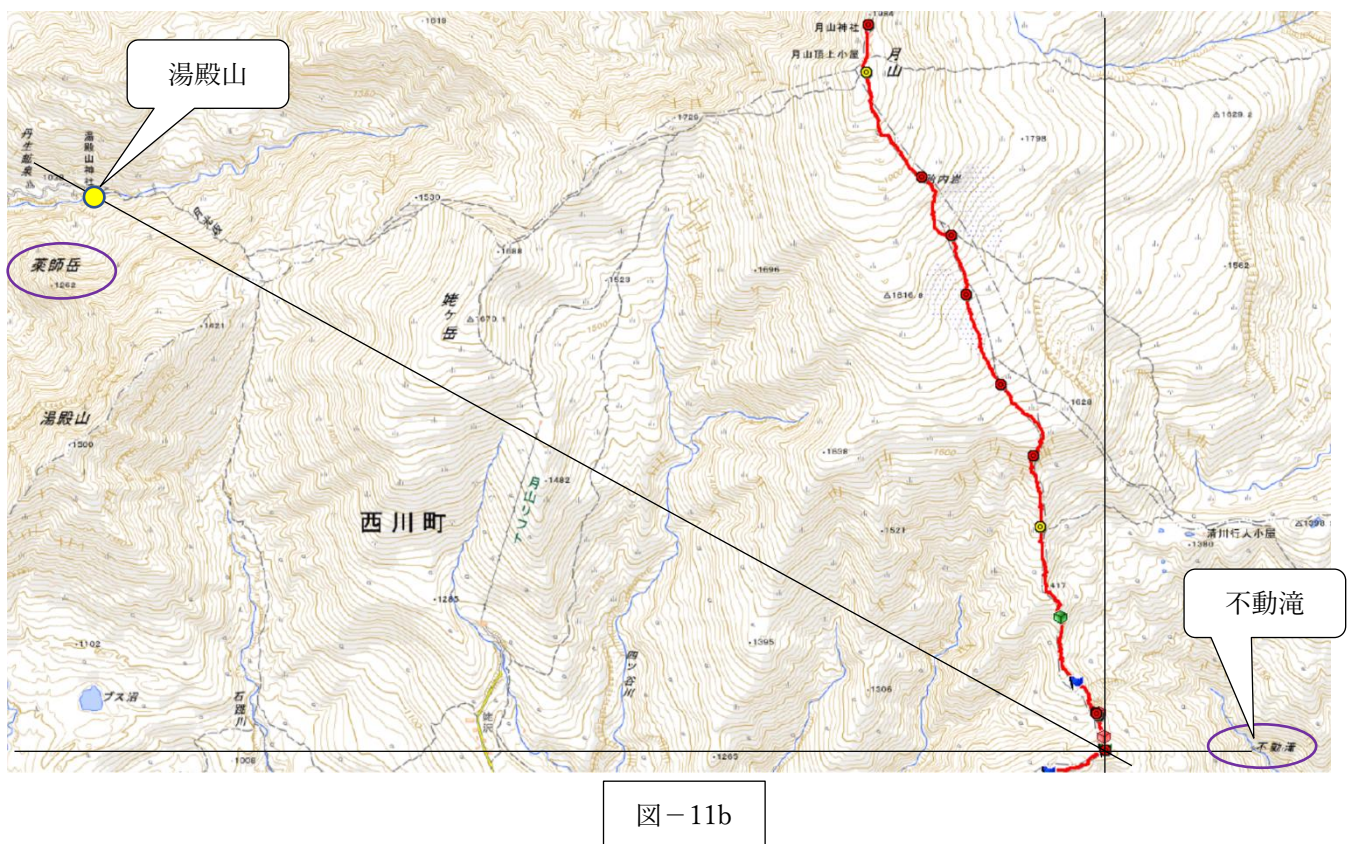
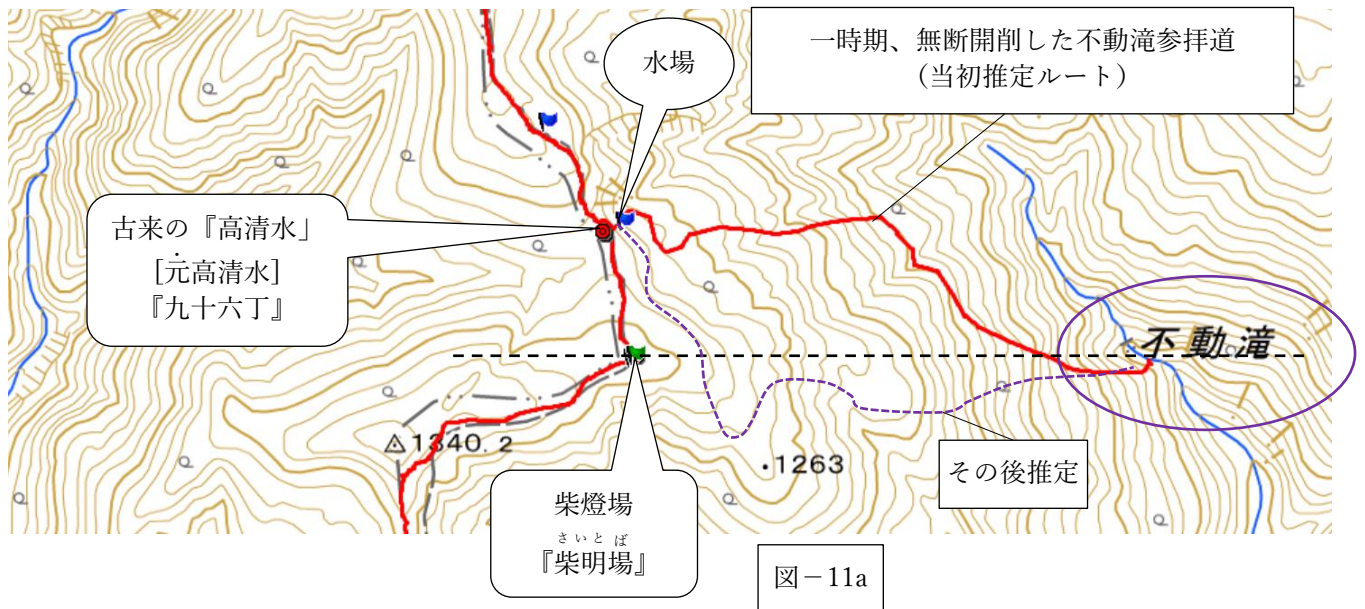
その結果は、後記図－10の2パターンである。視線に視角はあるにせよ直線的である。互いに松明を立てたとしても、互いの火元は絶対に見えない、もちろん、「柴灯森」側の標高がこの付近で低くなるほど視認性は悪化するばかりである。ただし、のろし（煙）は天候条件により見えることはあるだろうか。果たして、「柴明場」と「柴灯森」は結び付くのか、強引に関連付ける合理的な物語は作れるのか？ よしんば、そもそもこの位置の「柴灯森」の宗教的な意味合いは何なのか、繋げるにしても、これを解明してこそ「柴明場」との有用な係わりが見えて来ることになるであろうが、解けない。



図－10

(2) 複数の祭儀舞台～後記図－11ab 参照のこと

- ・柴を燃やした柴燈は、一つ目は、他と共通的な祖霊送迎の祭儀であって、ここもその舞台であったのか。南方麓の岩根沢・本道寺・志津方面の人々のみならず広域的に内陸方面の人々の思いを代参する心を以て儀式を行ったのかもしれない。
- ・柴を燃やした柴燈は、二つ目は、他と共通的な護摩祈祷を行った舞台であったのか。
- ・ここは平坦な高台・見晴し台となっており、三つ目は、月山・湯殿山、ならびに不動滝（不動尊）遙拝所の位置付けとしたのか。



(3) 当地における方位信仰との係り

前提として、この先の「高清水小屋」を経由して、月山へ、そして、最終目的地湯殿山へ行く行者(前者)と、この柴明場または「高清水小屋」で引き返すか、あるいは、「高清水小屋」に泊まるにして

も引き返す行者^(後者)の2パターンを想定する。そこで、ここでは後者のパターンに着目する。

✓ 1；北西方向

寂^{じゃく}静^{じょう}の境地と真智^{しんち}の光を持つ大日如来浄土の湯殿山遥拝の祭祀舞台としたのではないか。湯殿山にも祖霊祭祀の「岩供養」の場がある。なお、内藤正敏著「修験道の精神宇宙」(青弓社) P110-111には次の一説があります。「西北は靈魂の帰りゆく気持ちの悪い方角であり、・・・一方で、金銀財宝や米や酒を湧き出させ長寿をもたらしめでたい方角である・・・」とある。もう一つ注目点があり、湯殿三山(薬師岳・湯殿山・仙人岳)の中で、湯殿山御宝前の直ぐ南に「薬師岳」がある。もちろん、命名由来は言うまでもなく「薬師如来」が根拠だろう。同如来は旧本道寺開基の命名に直結してくる。また、北西は陰陽道の天門・神門でもある。

✓ 2；北方向

祖霊・祖神の集まっている阿弥陀如来の座す月山遥拝の祭祀舞台としたのではないか。また、北極星・北斗七星－北辰信仰に係る星宿信仰祭祀舞台としたのではないか。なお、同信仰は簡単に言うと、古代中国の宇宙観に由来し――北極星は天空中心にいる不動の星、すなわち、太極(太一、天皇大帝)などと呼ばれ、それを周回する北斗七星と共に神格化されて、仏教とも混淆し「妙見菩薩・北辰妙見大菩薩」などと呼ばれて信仰された。

✓ 3；西方向

西方極楽浄土には阿弥陀如来がいるとされることからの祭儀の舞台としたのではないか。その阿弥陀如来はここにおいては北方向の月山にも座^{おわ}すことになっている。

✓ 4；東方向

一つ目は真東方角の不動滝に祀る不動明王(不動尊)遥拝の祭祀舞台としたことだろう。別記のとおり、寛政八(1796)年頃前後の一時期、無断開削した烏川不動滝(不動尊)参詣道は、結局は岩根沢旧日月寺から幕府への訴上・裁定により、本道寺側はこの道を閉鎖せざるを得なかったようが、あれだけ熱い不動明王信仰を捨てた、当該不動滝信仰を諦^{あきら}めたはずはないと考える。もちろん、無断開削うんぬん以前から同不動尊の遥拝所としていたのは当然のことだろう。

二つ目は東の浄瑠璃浄土薬師如来の世界に対するお祈り場と見立てのではないか。

✓ 5；南方向には、北半球では見えない北極星に対応する南十字星(南半球では航海の目印としてもよく利用された)がある。本通り南方直下には旧本道寺とその関連集落群がある。

✓ 6；合わせて

この柴明場^{さいとば}は地勢的には見晴台である。確かに西南西の小山が支障となって360度の眺望という訳にはいかないが、信仰上の観念・観想の場としては格好の所である。一石二鳥という人間の欲張りに適えてくれる、とっておきの祀りの舞台と見立てていたと想像出来る。

(4) 第一遥拝所

当地柴燈場(柴明場)を第一遥拝所と見立てていたと推察している。「元高清水」の地は第二遥拝所と対応させたのではないだろうか。

(5) それら祭儀の祭祀者と期間等

a. 主に次のような点が想定される。

- ・ 別記したとおりの古来の高清水(今にいう元高清水)の小屋掛けには二名が常駐していたことから里からここに出向いた、二名は家来という言い方をしているが、高清水別当源養坊の配下の者で先達クラスの人物を充てたであろうと推測する。

- ・ 重要な祭儀においては、別当源養坊の^{あるじ}主自ら出向いて来たであろう。
- ・ もちろん、源養坊の許諾を得た他の山先達も対応したであろう。

b. 期間

- ・ 隣接する元高清水の小屋掛け期間—7月～8月（新暦）の2か月間に呼応して執り行った。
- ・ 行者の山駆け（参詣往来）の都度に対応した。

c. 水の確保

ここは高台・頂上部で水場はない。柴燈・護摩祈祷においては火が主役となるが、必ずや対比的な水も影武者として必要になる。もしも実際に調達するとすれば、ここから180mほど北側には高清水小屋があって、そこから降りて確保した水を利用したのだろうと推測する。

（6）その他関連

遥拝の信仰的意義について、遥拝とは字義のとおり、寺社に直接参拝せずとも、はるか遠く離れた場所から神仏に向かって拝むことである。しかし、肝心の祭神や本尊の鎮座されている前に行かないで、果たして賜るご利益の大きさは如何ほどの疑問が出るのは当然のこと。この答えには「分社・分霊・^{かんじょう}勧請」の意味合いを理解する必要がある。分社・分霊は本社から神霊を分けて祀る事をいう。勧請は分霊を他の神社に移すことをいう。日本神道では神霊は無限に分けることが出来て、分霊・灌頂は奉祀さえ怠らなければ本社（本場）の神霊と同じ働きをする、同じご利益を齎すとされている。全国の地方あちこちに沢山ある、いわゆる写し霊場（ミニチュア霊場とか、コピー霊場という）——四国八十八か寺霊場、西国三十三か寺霊場と意味合いが同じである。仏教も様々な菩薩、明王、如来があり同様の捉え方に通底する。

そこで、本件に戻って、不動滝参詣道を無断開削する以前からここで遥拝していたと想定している、しかし、直接対面で拝みたいとなって、直結道を無断開削したのだと推測する。このような過程の深層心理を読むと、遥拝では心底満足しないから開削を強行したものと考えられる。もちろん、遥拝の時は麓から大小はともかく不動明王を背負って、この場に祭壇を作り前仏として安置して不動滝に向かって、真言・心経等を読誦・奉納したと思う。しかし、それでも納得しなかった、心の中が満たされなかったということだろう。いずれにしても、その道を閉鎖した後も、遥拝を以って不動滝（不動尊）崇敬の祭儀を行ったことだろう。このような変遷をみると、果たして、分霊の真の実力とは如何に、である。

他に旧本道寺川から見た適地はなかったのだろうか？ それにしても、江戸期のこと、[※]最上領（白岩藩）内、高清水通りの西側には四ツ谷川（の支流）が迫って並行的に北上している。そこには、滝は大小数多あることだろう、いずれかの場所を選定し不動尊を安置・奉参することは十分可能だったはずである。しかし、なぜ、[※]新庄領の^{からすがわ}烏川のそれもライバルの岩根沢旧日月寺の奥の院に拘ったのか？ 大きな疑問が残る。当時はそれだけ、烏川不動滝の不動尊は、強力な神威仏光の力、格別な靈感神通力を放つものとして信仰されていたからであろう。揶揄的に言うが、他の諸々の不動明王の神通力を計測・比較検討出来るよう定量化出来ないものだろうか。

（[※]）ここでの旧藩は象徴・対比的に用いており、正確な年代引きの上で記述している訳ではない。

5. まとめ

古語[柴明場]^{さいとば}の名付けの根拠と意義付けについて考察してきた。ここで行っただろう祭儀は図-12のイメージ図のとおり、[柴明場]^{とにちげつかみ}については、明は日月、火水、この世・あの世、不動明王（仏）、神のみな神威仏光の勅命を背負ったシンボリック的存在として、統合の役割を担う代表的存在として、ことさら強調してその場（空間）に名称付けたものである、と解釈すれば納得するというものである。もう一つは、大同四（西暦 809）年に弘法大師空海が旧本道寺を開基しているが、山号寺号を「月光山光明院」と名付けた。その由緒に基づきその一字「明」を採用したのは間違いないだろう。特に注目したキーワード、日月、不動明王は大日如来（金剛界・胎蔵界）においては、日と月、火と水、金と胎^{男 おんな}は、陰陽対極に置くものの対（ワンセット）を以って、拡張性のある意味合いを引き出しているのだ。神についても記紀に遡れば、造化三神（独神）^{ひとりかみ}の「高御産巢日神」^{たかみむすびのかみ}「天之御中主神」^{あめのみなかつぬしのかみ}「神産巢日神」^{かみむすびのかみ}三柱から始まり、日本国誕生せしめた神に初めて陰陽は男女性別を与えられたイザナギ（男神）とイザナミ（女神）が大八島国を産み分けることになった。生むとは陰陽の成せる奥技（秘儀）なので、ここにも陰陽対の引込みである。しかし、この場所は、見晴らしの良い高台であるものの秘所・聖地と崇める月山山頂（御室）および湯殿山（御宝前）ならびに不動滝（不動明王）を直接肉眼で見ることは出来ないのである。いわば、明に対する暗の世界である。しかし、本通りにおいては重要視したのである。なぜなのか、信仰的意義からすれば、明（火・日・太陽）と暗（水・月・太陰）の対極を観想し、矛盾を克服する精神陶冶の内護摩——内心において煩惱焼却せんと、心の中で護摩焚き供養を怠ること——の舞台に見立てたということだろう。さらには、前記、祖霊送迎と関連付けについても考察して来た、同時点火・リレー点火という前提で考えていたが、齋行の月日^{がっぴ}のみを羽黒側と湯殿山側に合わせることで、同時点火は厳密に求めず、祖霊送迎の祭儀（あの世の人とこの世の人との交流・交渉）を大眼目（目的）として同じ日に齋行したということも考えられる。

修験道は、陰陽相対(待)二元を以って表現するが、対立を煽るための意図ではない、人間の迷いの根源ともなる二元論をあえて意識させて、その直後に、一つの「もの・こと」に入れている境界線の鍵を外すべくことに気付いて欲しいという強い意図の表れなのである。

いずれにしても、山先達が案内した行者は、そのような祭儀で心の浄化・純化・精化を図って清々しい気分になったことであろう。

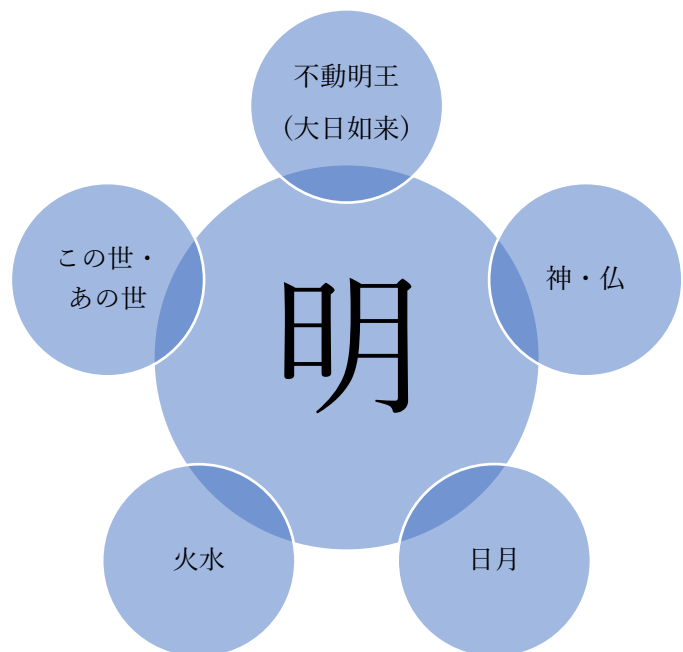


図-12

<end>